

Jürgen Trabant:
Mithridates im Paradies — Kleine Geschichte des
Sprachdenkens

清 水 朗

著者のトラバント氏はベルリン自由大学のロマニスティークの教授である。

ミトリダテスは紀元前 120–63 年頃黒海沿岸を支配していた王で、言い伝えによれば 22 の言語を解したという。つまりは多言語主義の権化のような人物である。それに対しパラダイスとはアダムが楽園に住んでいたときに話されていた「唯一の言語」(Lingua Adamica) である。『パラダイスのミトリダテス』とはそれ自体矛盾を含むのであり、そ

の意味で読者を挑発するものだ。それでは何がこの題名の裏に隠されているのか。

著者によれば本来的にヨーロッパの思想では多言語性が悪と見なされていた。しかし歴史を経るうちに多言語性に対する肯定的な意見も現れるようになった。だがそれも近現代の言語思想では言語普遍性の潮流に押され気味になっており、それにどう対処すればよいのかという著者なりの見解が最後に提示される。

なぜこのような総括的な事柄を最初に述べたのかといえば、それはこの本の記述がかなり込み入っており、その対象となるのも、聖書と古代ギリシア世界に始まり、ヴィトゲンシュタイン、チョムスキー、レイコフ、などなどに至るまで、あたかもヨーロッパ哲学・言語思想上の有名人のオンパレードのような観を呈しており、これらの言語思想観を一望するのはかなり困難であると思われるからである。これを著者は「多言語共存」と「言語普遍性追究」を軸として記述する。

旧約聖書では唯一の言語が支配していた樂園が「善」と見なされていたのに対し、人間の傲慢さに対する神の罰として与えられる「バベル」による多言語への分散は「悪」を象徴するものであり、単一言語への渴望がはっきりと表明されている。それに対し、古代ギリシアでは認識をしようとする者は物自体によって物を探求しなければいけないので、むしろ言語の不在が夢であった。聖書においてはコミュニケーションの側面が、ギリシア哲学においては認識の側面が重視されているのであるが、多言語性に関して両者ともネガティブな見方をしていることに変わりはない。そしてこれはその後のヨーロッパにおける言語観の底流をなしていく考え方なのである。

ローマ帝政時代のキリスト教はそれ以前のキケロ的な弁論術を忌避し、アウグスティヌスに代表されるように非言語的な真理の探究を重視する点で、むしろギリシア的な思想を継承する。人間は物そのものを通してしか学び、教えることは出来ないというわけだ。ここではやはり言語の多様性には無関心な態度が取られる。

中世に入ると、ダンテは『俗語論』によって、民衆語であったトスカーナ方言をラテン語の高みへと引き上げようとする。彼の言語観では言語は肯定的なものであり、人間を高めるものなのだが、これはヨーロッパ的伝統においては自明のものではなかった。この点でダンテは詩人として、ヨーロッパの哲学者達に逆らって、「言語の祭典」（つまり多言語性の顕揚）を実行したのだといえる。反面、彼は人間が歴史的存在であることを理解していたため、言語を場所と時間において普遍的なものとするため、文法（Grammatik）を必要とした。つまりは（トスカーナ方言以外の）イタリア語の野蛮なバリエーションを批判したのである。この意味で『俗語論』は「樂園の言語」（単一言語への渴望）への新たな試みであるともいえる、と著者は言う。

『俗語論』はラテン語で書かれながらも、広まったのはまずはその俗語訳（1529年）であった。この時、多くの人々は誇りを持って、活発に俗語で物を書き始め、ラテン語の「樂園」から離れ、「バベルの塔」の喜びに身を捧げ始める。1542年にスペローネ・スペローニは『諸言語についての対話』において、二人の人文学者がラテン語で書かれた書物が普遍的なものであるかについて議論している際、言語よりも「世の中」を上位に置

く若い宮廷人と、どの言語によって真実が伝えられるかには全く興味のない「新しい学者」を介入させ、言語に対する様々な価値観を対峙・相対化させている。ここにはすでにラテン語一辺倒であった言語価値観を覆すものがある。

ドイツでもその当時、ラテン語と俗語(ドイツ語)との同権化が進み、コンラート・ゲスナーは『ミトリダテス』で世界の言語の著述を試みるが、これは18世紀に、アーデルングとファーターによって事実上引き継がれる。

逆にイギリスではフランシス・ベーコンが、概念が言語に制約されることを認識したがゆえに、多言語使用は我慢ならないことであると考え、真の認識を妨げるものを *idola* (幻影; 一神教の敵である異教の神々) と呼んだ。この哲学と学問の敵である *idola* からその後のヨーロッパの哲学のメインストリームは脱却できないままになる。例えばロックも言語の「不完全さ」という「目の前の霧」を追い払わねばならないという、ベーコン的立場を取り、苦闘する。

フランスに目を向ければ、デカルトの真理の王国にも言語は不在であって、*cogito* とは純粋な志向の内面性のことであり、結局のところデカルトの言語把握は古代ギリシア的である。一方、ポール・ロワヤル文法では以前の言語普遍性から、個別言語の枠を越えた文法上の一般性が探求されるようになる。同じくフランスの経験主義哲学者コンディヤックは言語と記号を肯定的なものとして捉え、言語記号の歴史は人間精神の感覚的なものから理性への発展だと見る。

さらに再びドイツに目を転じると、ライプニッツによれば、総ての存在は異なっているがその相違性において大きな全体の調和的な部分となる。相違性とは彼にとって(一つの正しい世界観にこだわるロックなどとは異なり)破滅ではない。そうではなく、我々の精神とその作用の素晴らしき多様性を知るために世界の総ての言語が叙述されるべきなのだ。言語分析は他の総てのものにもまして人間精神への入り口となるのだから。コンディヤックの言語への共感がここではその働きと機能への「祝祭」(多言語主義)へと高められているのである。

イタリアではヴィーコが、思考とは同時に話すことであり、何よりも「詩的な性格における語り」であるとし、人間の言語記号の歴史は人間精神の歴史と同一のものであると考えた。その意味でヴィーコの哲学は初のヨーロッパの「言語-哲学」であるといえりと筆者は言う。

時下ってフランス革命時には誤った考えを生み出す民衆語(方言)を除去するように努められ、フランス共和国は「楽園の言語」(*Lingua Adamica*, つまりフランス語)を持つようになる。しかしまた、フランス語そのものも(ラテン語に対する)民衆語で、誤った概念を含むため、それ自身改革され、革命されるべきものとされる。

ドイツの18世紀に関しては、ヘルダーが言語学の端緒とすべく、言語の自律的・学問的テーマ化を行った(『言語起源論』)。彼は、言語は世界への意味的・認知的な関係から発生し、「思考は言語である」と言うに至る。ヘルダーによれば、一つの精神(聖霊)が人々を異なった言語のもとにおいても統一する。言語が異なろうが人類は同じ一つの人

類言語を持つのである。しかしながら彼はパラドクシカルにも、それらを近くから眺めた場合の「多様性」に重きを置く。

前述したアーデルングとファーターは『ミトリダテス』において500言語での「主の祈り」(Vaterunser)を収録する。実際のところそれは我々の精神活動の素晴らしき多様性についての情報を提供するのだ。

19世紀になると、ドイツを中心に歴史比較文法が盛んとなり、Fr. シュレーゲル、ポップ、J. グリムといった面々によって諸言語の違いの中から、印欧祖語という樂園への遡行が始まる。そしてこの統一された言語への希求(「言語普遍性」)は19世紀中続くことになるのである。

他方で、同世紀にヴィルヘルム・フォン・フンボルトは自ら旅したバスク地方でインド・ヨーロッパ語とは全く異なった構造をもつ言語を語る他者(andere)と出会う。フンボルトもまた言語とは思考であると考えるので、それぞれの「国民=言語」はそれに伴った思考を持つという立場を取るのである。この意味でフンボルトも「言語の祝祭」派であると言えよう。

20世紀に入ると、思考は言語によって異なるのみならず、言語は完全に思考を支配すると考える、サピエ=ウォーフによる言語相対論が現れるのに対し、チョムスキーは普遍文法でそれと極端に相反する立場をとる。言語とはチョムスキーにとって内面的かつ精神的なメカニズムに過ぎないのである。その際、言語とは歴史的・文化的・個別的なものではなく普遍的(Universelle)なものなのだ。そして言語はコミュニケーションから根源的に解放され、「内的言語」、「純粋な思考」であるとされる。ここに再び「言語普遍論」が姿を変えて現れるのだ。

一見チョムスキー理論に対峙しているように見えるレイコフなどの認知言語学は、その中心が統語論ではなく語彙意味論にあり、言語の多様性に関してより多くの共感を持ってはいる。しかしながら「身体-言語学」も身体が(チョムスキーの「精神」同様)普遍的なものであるため、やはり言語普遍論の一種であるとされる。

今日、MIT やパークレーで考えられている言語学はすでに言語学的プロジェクトではなく認知科学という精神科学である。そしてその犠牲となるのは、歴史的差異における諸言語の叙述なのである。20世紀にはいつてからも、大抵の世界の言語は記述されたが、新しい『ミトリダテス』はまだ完成していない。多くのアフリカの言語がその記述を待ち受けているのである。

問題の解決は「統一と相違を共に考えること」に存すると著者は考えている。つまり、ミトリダテスを樂園から追い払わずにアダムと融和させることが肝要なのである。ところが現在ではグローバル語(Globalesischつまりは英語)で書かれあるいは翻訳されたものが受容され、ギリシア語、ラテン語、フランス語などで書かれた文学は重んじられていない。

Globanglisierung は世界の言語的統一の過程を暴力的に進め、他の言語は学問・技術・ビジネスなどから締め出されている。しかしながら、地球上にただ一つの言語があると

いうことは、「コミュニケーションの上での楽園」であるかもしれないが、「認知上・認識上の地獄」であり、つまり「愚かさの勝利」なのだ。

著者は以上に述べたように、「言語普遍性」か「多言語共存」かを軸にヨーロッパの言語哲学を区切っているのだが、その方法にはところどころ無理があるようにも思える(例えばダンテはどちらの立場なのか? そもそも「アダムの言語」と「言語の不在」を同一視してもよいのか?)。そうした難点にもかかわらず、Globalese, Globanglisierung に批判的な立場は良くわかるし、私自身もそれに共鳴するものではある。だがしかし、「統一と相違を共に考えること」の実態が何であるのかを考えると、その具体的なイメージは浮かびにくい。私としてはそうである事を願いつつ、「愚かさの勝利」には決して立ち会いたくないと思うのであるが、皆様はどう思われるだろうか。(C. H. Beck, 2003)